

読売選書 19



磯田光一

悪意の文学

悪意の文学

光二



読売選書

19

著者略歴 1931年生まれ。東京大学英文科卒。

文芸評論家。

著書に『殉教の美学』『吉本隆明論』『比較転向論』

『文学この多面的なもの』『戦後批評家論』など。

読売選書 19

悪意あくいの文学ぶんがく

昭和四十七年四月三十日 第一刷

著者 磯田いそだ 光一こういち

発行者 二宮 信親

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一七二一〇〇
大阪市北区野崎町七七五三〇
北九州市小倉区明和町一の二一八〇二

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

定価 六五〇円

©, KOICHI ISODA, 1972

悪意の文学

目次

I

非革命者のキリスト——武田泰淳論(Ⅰ) 9

Ⅰ恐怖症患者の振幅——武田泰淳論(Ⅱ) 33

自罰者の聖痕——高橋和巳論 49

葬儀師の殺意——野坂昭如論 68

天皇制とスターリニズム——井上光晴への手紙 88

悪意の政治学——花田清輝『鳥獣戯話』 103

可変空間について——安部公房論 113

日本の自然の殺意——石原慎太郎・深沢七郎・高橋和巳

“絶対”喪失者の戯画——小島信夫論 158

単独者の宿命——森万紀子論 177

近代日本の異端——永井荷風について 189

聖俗統合の人間学——坂口安吾について 198

II

『新体詩抄』のディレンマ 215

『文士商人説』の逆説——批評家白書 235

現代における抽象美 240

“驢馬の耳”私考 253

三島事件と知識人 259

III

『制服』の魅力と恐怖——『地獄に墜ちた勇者ども』 269

ストイシズムの栄光と錯誤——『最後の特攻隊』 273

暗殺の思想のゆくえ——『日本暗殺秘録』と『女体』 282

ボナパルティズムの崩壊——『やくざ絶唱』と『煉獄エロイカ』 289

私の精神主義 297

あとがき 300

初出一覧 302

装丁 栃折久美子

悪意の文学

I

非革命者のキリスト

——武田泰淳論（I）

1

「ここに十二弟子の一人イスカリオテのユダといふ者、祭司長らの許にゆきて言ふ『なんぢらに彼を付さば、何ほど我に与へんとするか』彼ら銀三十を量り出せり。ユダこの時よりイエスを付さんと好き機を窺ふ。」（マタイ伝・二十六章）

ユダはなぜイエスを裏切る必要があつたのであろうか。彼は本当に銀三十枚が欲しくて、イエスを裏切る気持ちになつたのであろうか。こういう問いに、簡単な答えの出でこようはずはない。答え方そのものが、否応なしに答える人間の陰影をもたずにはいないからである。この問いにたいする武田

泰淳氏の答え方は、きわめてユニークな性格をもっている。『わが子キリスト』を発表した直後における河上徹太郎氏との対談では、それはたとえば次のような形をとってあらわれるのである。

武田 大体あの大金持ちのユダがね、どうして銀三十枚ぐらいでね……。

河上 だって、大金持ちだから、その上ほしいんだよ。

武田 そうかな？。ぼくはね、あれ、どうしてもおかしいと思うんだ。あれはね、結局、ユダが自分自身でそうしたと思うんだ。つまり全部の弟子が裏切ったでしょ。これじゃあ、キリスト教というのは残らない。だからユダは、自分が裏切ったとなれば、ほかの弟子は救われる……。ぼくはそうだと思う。

河上 これはおもしろい説だ。

武田 ユダはほんとうにキリストを愛していた。ユダは死ぬつもりだったんだ。死んだでしょ。自殺。松陰と同じです。

いったいこのような形の聖書解釈が、どの程度に妥当性をもっているのか私は知らない。またユダの行為に関して、教義上どのような解釈が可能であるのかも、私は知らない。しかしユダを反キリストとしか見ない通念には、まさにそれが通念であるがゆえに、おのずから一つの限界があるとはいえないであろうか。後世はユダの上に「悪」の烙印を押し続けた。それを不当なものとする見方も、も

ちろんありえよう。しかしユダがそういう「悪」の汚名をこそ、ひそかに求めていたのだとしたら、事態は相当に異なったものになるはずである。武田泰淳氏のユダ観は、じつはそういう地点からはじまるのである。世間の指弾を受けることが多ければ多いほど、かえってキリストの近くにいられるという逆説が、そこに成立可能なものとなるからである。裏切るまいとすることによって聖者の列に加えられるよりも、むしろ聖者になる道を完全に断たれる行為を犯すことによって、武田氏のユダは、ひそかにキリストからの断罪を期待している。相手と和解することだけが、必ずしも相手につながる道ではない。故意に裏切り、自己を断罪にゆだねることによって、逆に無償の愛の心を証明するという方法もありうるからである。

こういうユダの肖像を描いた作品としては、すでに太宰治の『駆込み訴へ』がある。そして太宰のユダ像の背後に、太宰なりの裏切りの意識、つまり転向の問題がひかえていることはいうまでもない。キリストへの愛の深さのゆえに、逆に金銭のための裏切りを敢行したユダを描き、そうすることによって太宰は彼のキリストを、つまりコミュニズムの幻影を、聖なるものとして保存しようと願ったのである。裏切りの罪が深ければ深いほど、聖なる理想は虚空のかたに美しく輝きわたる。それなら『駆込み訴へ』の太宰が、ユダを主人公にして一人称で作品を書いているのにたいして、『わが子キリスト』の武田氏は、なぜマリアを犯したローマ兵の視点から、キリストやユダを描かなければならなかったのであろうか。この両者の間には、たんに時代や作者の資質とは別に、青春の理想主義の崩壊が作家に何をもたらしたかという内面劇が、やはり隠されているように思われる。

昭和十三年に『中国文学月報』四十四号に發表された武田泰淳氏の「北京の輩に寄するの詩」という作品がある。

北京に集りし我等が輩よ

中支からでは悪口もとどかぬなれど
かくもあこがれの一角に集りし輩に

何か言はずに居られようか

嘗て銅幣にめぐまれざりし我等

そば屋にて麦酒飲みて

宙天より落ちたる勢物凄く

東方の文化を喰ひものにする者共を嘲り

更に屢々使徒面したる我等自身の鼻先をつまみあげたるが

そは大陸の城の中には非ずして

アカデミイの古本に囲まれたる

本郷の巷にてありし

今お前等のあこがれの北京の秋

澄みたるは北京の空だけで

お前等の眼は黄塵に濁つてゐるだらう

黄塵に濁るとは何たる幸福者ぞ

お前から心優しき驢馬よ

忘帰忘帰と啼き

文学の綱に縛られて

天に向ひて憐れみを乞ひたるも

現実の雲は美しきが故に冷酷に

我等支那病患者の上に垂れ下つてゐた

(傍点・引用者)

ここに武田泰淳氏の文学の出発点が、ほぼ過不足なしに定着されている。かつて竹内好氏らとともに結成した「中国文学研究会」は、「東方の文化を喰ひ者にする者共を嘲り／更に屢々使徒面し」て、新時代の予言者にも似た誇りをいだいていたかもしれない。しかしそれは、どこまでも「アカデミイの古本に囲まれたる／本郷の巷」においてだったのである。だが考えてみるに、この「本郷の巷」に建てられた幻影の孤塔は、はたして武田氏にとっては何を意味していたのであろうか。

僧侶の子として生まれた事実を、武田氏の運命の星と見る見方は、その一面の正しさにもかかわら

ず、それが必ずしも武田氏の素質を決定した要因とは信じ難い。中島敦を論じた「作家の狼疾」というエッセイにちなんでいえば、生活環境は「狼疾」を「狼疾」として自覚させるのに役立っただけである。それなら武田氏にとって「狼疾」とはどういうものであったのだろうか。それはたとえば『異形の者』における僧侶の主人公の、次のような感じ方につながる何ものである。

私は人々がいつ私たち（注・僧侶）を呼びに来るかを知っていた。ある一家のある一人が死ぬ。あるこの世の一人が、この世からいなくなる。すると残された人々は私たちが必要のような気がしてくる。つまり人々は、あの世に関係した一群の異物が、この世にいたことを想い出す。そして私たちを呼びむかえる。私たちは専門家らしく、屍のかたわらに座を占める。（中略）

つまるところ、私たちがこの世で存在意義をみとめられるのは、あの世というものが人々の頭を、ホンの一寸かすめすぎる時にかぎられている。だがこの世に生きているかぎり、人々はあの世をいみきらう。したがって、それを想い出させる、黒衣の専門家たちが大きらいなのだ。

こういう叙述が、誇大に失っていないというわけではない。しかし「黒衣の専門家」として自己を意識するとき、それは「職能人」としてしか現世とつながることのできない、暗鬱な孤絶感を意味しているとはいえないであろうか。現世は悪意のまなざしをもって、彼を見つめる。しかし彼には何ひとつ誇るにたりのものはない。もし自己と外界とが、こういう緊張関係を保ち続けることができた